

大正期の立命館中学校と中原中也

橋本 二三男

一、校名改称と教育の刷新

一九一三（大正二）年十二月、財団法人「立命館」が設立されると、私立清和中学校は「私立立命館中学校」と改称され、これを機に、学監として京都帝国大学文科大学教授文学博士小西重直氏が、主事（校長）には同学科出身の文学士福島亦八氏が任じている。その法人設定発表会における小西學監の演説は、同時に就任の決意表明でもあった。当時の、ドイツ、イギリス、フランス、アメリカ等の教育とその研究の実情に比して、日本のそれらは遜色あることを述べ、「日本の社会は堅実なる品性を持つて確実なる智識を備へ又腕の力即ち相当の技能をも持つ所の青年を要求することと思ふ。而して此の要求に対する土台を作ることが我々の任務であるのである。」と、新教育への出立を宣言している。

このことは、法人設立と同時に編成された教員の陣容を見ても、学監および学園の決意の程が並々ならぬものであったことが窺える。一九一四（大正三）年一月現在の教員組織について『立命館中学の過去現在及将

本校は最職員の組織に注意し各學年各學科とも皆學力經驗の十分なる職員を充當し以て教授内容の完全を圖り之が爲にむしろ他の費目を節するも教員給の増大を意とせざるなり。
 本校開校當初の職員左の如し

擔任學科	出身	姓名
學 監	東京帝國大學	小西重直
主事・修身	京都帝國大學	福島亦八
數 学	私立東京物理學校	小泉伊之助
國 語	東京帝國大學	鶴田多八
英 語	東京外國語學校	岡 健夫
歷史・地理	京都帝國大學	川島元治郎
歷史漢文地理習字	官立大阪師範學校	小谷時中
英 語	京都帝國大學	松本亮三郎
漢 文	京都帝國大學	本田成之
漢文・國語	京都帝國大學	野口幾三
博物・地理	檢 定	河野鴻介

英語	同	妹尾勇
數學・物理	京都帝國大學	荒井松之助
國語・歴史	東京帝國大學	瀬尾武次郎
英語	東京外國語學校	高田讓
化學	京都帝國大學	山内淑人
英語	英國婦人	サウター
圖畫	檢定	久保薰歟
體操	陸軍々曹	西村兵市
體操	陸軍特務曹長	橋井銀之助
數學	東京物理學校	坂田忠次郎
學校		村田於菟次郎
醫學		

中川館長の積極的な教育充実への意気込みによる、小西学監就任のいきさつと、それによる教学上の変化について、同書は次のように記している。

法人立命館の設定せらるるや中川館長は當時の京都帝國大學総長澤柳政太郎氏を訪ひてその翼賛を乞ひ殊に中學の爲め文科大學の後援を得ること恰かも大學が法科大學に受くるが如くならんことを

望みしに総長之を快諾し教育學教授文學博士小西重直氏を右中學々監に推薦せられる。此に於て小西學監は更に同文科大学教育科出身文學士福島亦八氏を中學主事に任じて教育の實務を統括せしめ兼ねて又便宜上文科大學教育學科研究との關係をも密接ならしむることを圖れり。(中略) 該教育科學生は時々本校を見學又は實地授業等を試み主事又は教員と意見を交換し又主事は該科研究会に出席して學生等の質問に應じ又は意見を交換することに努むる等両者の聯絡を圖りつつあるの現況なりとす。

この『立命館中学の過去現在及将来』は、「立命館」に改称後、つまり小西重直教授の学監就任から五年後のまとめであるが、小西学監就任によつて本校は、實質的な京都帝大教育学教授法講座の付属の研究機関となつたことを記している。

二、小西重直と教育の方針

京都帝大の教育学教授法講座は、一九〇六(明治三十九)年の文科大学設立と同時に設けられた講座であり、初代担当教授は、「従来の画一制の教育を廃し、生徒の自然に従つての個別的差異的を主張した」谷本富教授であつた。小西重直教授は、この後任として一九一三(大正二)年八月から同講座を担当している。

この小西重直教授の教育学説は、「前任谷本教授の教育目的論及び方法論を継承すると共に、ルソー、ペ

スタロッチー、シュライエルマッヘル、ナトルプ等の教育理論を以てこれを深化し、更に我が国古来の教育説を綜合して、主意主義・劳作主義の教育学を建設せんとするもの」であり、「特にペスタロッチーの人格と学説に傾倒し、その在職中本学の教育学研究室は実に我が邦に於けるペスタロッチー研究の重要な中心となったもの」(一九四三(昭和十八)年十二月二十日刊『京都帝国大学史』)であり、「敬・愛・信を基調」(『京都帝国大学七十五年周年記念史』)とするものであった。

「英国に於いても智識や技能の伴はない品性では實際社会に立つて役に立たぬから獨逸や米国の長所を取らんと苦心して居る……我が国に於いても御互いに努力して研究すべき点は決して少なくないのである」(法人設定発表会での演説)と、当時の日本に新教育の必要性を抱いていた小西学監は、立命館中学学監就任に際して、次のような、「社会の要求する三ヶ条の人物資格と十項の指導方針」を示した。(『立命館中学の過去現在及将来』による)

一、堅実なる品性

二、確実なる知識

三、有力なる手腕即実行の技倆

イ、浮華虚飾を戒め真摯着実を重んずること

ロ、形式の整頓よりも寧ろ内容の充実に努むること

ハ、生徒に対し無益の束縛を除き自治自制の風を發達せしむること

- 二、勤勉刻苦の習慣を養ひ怠慢放恣の風を防止すること
- ホ、自己の本分責任の觀念を發達せしむること
- へ、怯懦輕率を斥け沈毅勇敢を重んずること
- ト、運動を奨励し元気を振起せしむること
- チ、知識はその該博なるよりも精確なるを尚ぶこと
- リ、知識模倣よりも推理判断を重んずること
- ヌ、知識は徒に獲得に甘んぜず進みて之が応用を図ること

これらの指導方針は、現在の立命館中学高等学校の教育理念と酷似している。一九八四年三月にまとめられた「二十一世紀を展望する教育づくり」（『高中教学推進委員会答申』）は、戦後に積み重ねられてきた「学業と補導」から「学力と生活指導」の教育実践の教訓と反省の上に立って、二十一世紀の教育を展望したものであり、現在のカリキュラムの基盤となったものであるが、知育偏重ではない「全人教育」をめざす点において、この大正期ともつながっている。この答申では次のようにまとめられている。

めざす生徒像

ア、民主的な基本的な生活習慣を身につけ、確かな基礎学力と意欲的な自主的学習力を持ち、積極的に課題に立ち向かうことのできる生き生きとした生徒

イ、民主的・集团的・組織的な自治活動のできる力をもった生徒

ウ、学習と生活を支える基礎体力をもった生徒

エ、働くことの大切さを知り、自己の個性・能力をいっそう伸長させ、進路を自主的に選定し実現できる生徒

めざす学力

ア、基本的な知識と技能

イ、分析・総合・概括する力

ウ、個性的自立力と集团的自治能力

エ、豊かな感性に基づく自然観・科学的認識にもとづく豊かな社会・世界観

(立命館中学校高等学校『八十年の歩み』所収による)

更に、小西学監は、現在、生徒会が主催している文化講座と同質の「機会ある毎に自ら講演を試み、『生徒の知見を開き常識を養ふこと』に努め」、「各士を招聘して催した」(『立命館創立五十年史』)。この文化講座は、大正三年度では「南洋観察談」ら計三回、四年度では「鳥港満州支那本部旅行談」ら計四回、五年度では「英獨国民性について」ら計六回、六年度では「世界探検実地談」ら計三回、といった精力的なものであり、その講師も多彩であった。

三、小西学監の「新教育三年後の中間報告」

ここに、当時の学校や生徒の実情および小西学監の教育実践を知る上で、実に興味深い資料がある。台湾銀行副頭取として任地にある中川小十郎館長に對して、小西学監が立命館中学校の教育の現状について報告した、一九一七（大正六）年三月七日付書簡である。長文であるが、貴重な資料なので全文を記録しておく。

【書簡】 便箋十五枚・ペン書き（注・□□は判読不明箇所）

臺灣 臺北 城南街 中川小十郎 様 親展

大正六年三月七日付 京都 塔ノ段 小西重直 出

拝啓御懇書難有拜見仕候、西洋人ニ関スル事ハ御意見御尤ノ点有之從來モ大体新ガル意味ニテヤ
 リ来リモ効果期待ノ如クニ參ラズ偶々柔道問題モ起リ候ニ付御考ヲ煩ハシ候次第ニ御座候 十分ナ
 ル効果ハ困難ノ事トハ存候得共御高見ノ次第モ有之候ニ付当分其俣トナシ一層効果ヲ挙クルコトニ
 努力スベキ様申含メ又柔道ノ方モ四月ヨリ開始ノ事ニ相談仕候間御含ミ置被下度候

去年度中学ノ過去及現在ノ状況ヲ一冊子ニ纏ムル事ハ至極同感ニ御座候 実ハ過般主事ト相談
 ノ上各教師ノ研究心ヲ高メ中学教育ニ對シ一層熱心ノ度ヲ強カラシメン為メ吾々及各教師ニ於テ中
 学教育改良案ナルモノヲ起シ一ハ實際家ヨリ見タル中学々学制改革ヲ公ニシテ見テハ如何ト存居候

她現在ノ教師ニテハ多少困難ノ点モ有之未タ具体的着手ノ運ニ進ミ至ラズシテ一二ヶ月其假ニ經過シ来候 于茲御来旨ノ様ナ意味ニ於テ立命館中学ノ過去及現在ノ実況ヲ纏メ候ハバ比較的容易ノ事ニテ又各学科ニツイテ教師ヨリ教授上ノ意見ヲ提出セシメ夫レヲモ相加候ハバ穩健ナル方法ニ於テ吾々共ノ考ヒ居候 目的ノ幾分モ達シ得ベキカト存居候 何レ末弘及主事トモ相談ノ上是非成立為度受取居候

又主事ノ出張ノ事モ至極同感ニテ実ハ教師ノ出張モ実行シ度存居候モ度々經費ニ対シ遠慮ノ念有之從來差払居候事御座候、今回ハ尚具体的に相談致度存候

成蹊学校ニ関スル御感想中参考トスベキモノ不尠ル様ニ存候 尤モ成蹊学校及澤柳博士ノ成城小學校(当大学卒業生ヲ主事ニ推薦致候)ノ教員組織ト立命館中学教員組織トノ間ニ尚餘程一同一離有之我校ノ教師ハ乍遺憾献身の(尤モ成蹊学校ハ教師ノ待遇モ頗ルヨロシトノ事)熱誠ノ度ニ於テ此等ノ学校ノ教師ニ及バサルモノ有之(此点ハ現在ノ教師ハ兎ニ角從來ニ比シ一段ノ精選ヲ施セルモ未タ理想的ニ至ラズ、頗ル苦心ヲ要シ居候)從テ此等ノ学校ニ於テ実行シ得ルト同程度ノ徹底ハ困難トハ存居候得共参考トスベキ催モ有之候得共未タ振ヒ居ラズ候 今後一層奨励スル必要アルコトハ教師ノ意見トシテモ出テ居リ候、五年生ニ対シテ從來小生ノ主催トシテ大学ノ学生集会所ニ招キ茶話会ヲ開キ、教師、生徒ノ談話、大学ノ教育学専攻ノ学生ノ談話、餘興ニ講談琵琶ナド迄モ近頃加ヘ居候、昨年ヨリハ訓練上四年生モ小生ノ主催トシテ茶話会ニ招キ同様ノ催ヲ行ヒ多少アル益ニ認メ居候

教員欠勤ノ場合ニ基礎学科補充ノ事ハ方針トシテハ変リ不申ノ考ニ候教師ノ負担ヤ時間割等ノ都合モ有之何時モ其通りノ実行ハ困難ニ候由又一般ニ補充ハ教師モ生徒モ突然ノ事故準備ナキガ為メニ思フヨリモ効果ハ少キ様ニ考エ居リ存候 兎モ角出来ル丈励行致シ居ル筈ニ御座候

四年五年ニ佛語又ハ独語ヲ学バシムルコトハ面白キ案ニ御座候 小生一昨年支那旅行ヨリ帰り約十カ條許ノ意見ヲ文部省ニ提出致置候ガ其中ニ中学其他ノ学校ニ於テ英語ノ外ニ支、露、佛、独等ノ語学ヲ学ビ得ル様制度ノ改正及実施上ノ奨励ヲナスコトモ申出置座候（佛独ハ今日ノ法令ニテ差支ナシ 英佛独ノ中一科ヲ必修トストアリ）ガ立命館中学ノ現況ニテハ生徒ノ高等ノ学校ニ入学スルノ力ヲ養フコトガ第一ニ有之一昨年ヨリ上級ニ英数等ノ特別時間ヲ設ケ置候（三年生以下ハ劣等生ノ為メ……之レハ落第スレバ退校スルモノモ有之此ヲ防ク一方法ノ意モアリ）ガ其上ニ尚第二外国語ヲ学ビ得ル余裕ヲ生スルニハ餘程学科ノ整理ヲ行フ必要有之候 何レ研究致見度存居候 実ハ曾テ一年ヨリ五年迄英語デナク独乙語ノ級ヲ設ケ見度シトモ考候事有之候 成城中学ニテハ数年前ヨリ実施シ居候 生徒少ク経費多シトノ話ヲ聞居候

大学豫科ニ独語ヲ置クコトハ多分成効カト存候 希望者ハ相当有之ランカト存居候 御一考ヲ煩ハシ度候

中学ノ方ハ将来実業ニ就ク者ノ為メニハ支、露等ノ語学モ如何ト存候

鍛練的ノ遠足モ同感ニ候 立命館に改称後第一回ノ叡山登山ニハ坂本ヨリ唐崎迄風雪ノ中ヲ馳足サセタル事モ有之候 其後之ニ類スルコトヲ度々実行致シ居ル筈ニ御座候 運動場狭ク殊ニ冬期ノ

間ハ霜トケノ為メニ此ラ使用シ得サルコト少ラズ、此頃ハ器械体操ニ巧ナル教師居候ニ付此方面ニテ多少償ヒ居候得其他校ニ比シ度々野外ニ出スコト必要カト存候 従来八年ニ三回許リニ相成居候ガ尚回数ヲ増加スル必要アランカト主事モ申居ルコト御座候

草取農作物ノ実習作業ハ適當ニ行フ時ハ至極有益ト存候、然シ此ヲ度外レニ行フ時ハ却テ弊害モ多ク、先年タシカ京津ノ中学ニテ実行失敗ニ終リ、名古屋ノ明倫校ニ於テモ先ツ成效セズ遂ニ校長モ軫ジ廢止致候 平素日課の二行ハシムルモノハ多ク失敗致居候 然シ實際ノ必要上時ニ行ハシムルハ訓練上有益ニテ生徒モ勇シテ行フモノトナリ尚寄宿舎ニテハ先年ヨリ礫石ノ地ヲ生徒二分與シ生徒ハ自ラ進ンテ此ヲ耕シ花ヤ野菜ナドヲ作り申候、今ノ学校ノ庭園ニテハ到底其目的ノ為メニ使用スル空地無之カト存候

之レト多少趣ヲ異ニスル作業ヲ新行候 この間十年記念ノ時ニハ某級ハ門ノアーチヲ受持チ、二三里ノ道ヲ遠シトセズ山ニ入りテ杉葉ヲ買ヒ車ニ積ミテ持チ運ビアーチモ全く生徒ノミニテ見事ニ作り申候、斯カル意味ニ於テ□□□□目的ヲ有スル作業ヲ時々行ヒシムル方却テ有益ト存ジ一般ニ今ノ青年ハ意志弱ク力行ニ乏シク候故何トカ工夫スルコト至極肝要ト存居候

思想統一ノ事ハ殊ニ軽浮ナル今ノ青年ニハ必要ト存候モ成蹊学校ノ如ク一ノ得策トシテ一扁ニ凝念法ヲ行フハ餘程考物ト存候

某高等学校ニテモ其例有之候ガ生徒ハ全く形式的ニシテ其精神ナク中ニハ後席ノモノハ教師ガ目ヲ塞ク際新紙ヲ読メリトイフカ如キ事有之候 今日ハ実行致シ居ラサルモノ有之候 成蹊学校ノ如

キ大体此点ハ結果宜敷様ニ聞及居候ガ夫レニハ特腕ノ教師ヲ招聘致居ル様子ニ候 元中学校長タリ
シ槍津トイフ人ハ此ヲ専門ニ行ヒ居筈ニ御座候 立命館ハ校舎甚タ狭ク設備ノ点ヨリ見テモ兎角乱
雑ノ嫌有之、生徒ノ落付モ重カラサル様ニ思ハレ昨年ハ実ハ或意味ニ於テ注意集注ノ目的ヲ以テ

今日ハ極メテ面白クナイ話、極メテ無趣味ノ話、又理解ニ困難ナ話ヲ

ナス積リデアアルカラ諸君ハ夫レヲ辛抱テ聴ケ ドノ位辛抱出来ルカタ

メシテ見ヨ

ノ前置テ奈良県ノ模範村、北倭村ノ実状ヲ話シ候処妙ナモノテ反対ノ暗示トデモ申カ生徒ハ何時
モヨリモ注意ヲ払ヒ一年生ノ生徒マデモ静肅ニ一時間以上ノ無趣味ナ話ヲ謹聴致候事有之候 子供
ハ誠ニ可愛モノト存候 呵々

凝念法ノ如キ思想統一ノ事ハ成ルベクハ個人々々ニ奨励シ一扁ニヤラヌ方宜敷事ト存行候得共一
般ニ注意集注ノ習慣、自己反省等ノ習慣ハ平素学校ニ於テ出来ル丈注意ヲ要スル事ト存候

色々乱雑ニ申上候ガ御来旨ノ事ハ種々ノ点ニ於テ参考ト相成ル事少ラズ候ニ付十分相談致度存居
候 尚今後モ御氣付ノ事ハ時々御申越被下度候、今回ノ御書面ノ御趣意ニ就テハ教師ニモ話致シ研
究上ノ刺激ト致度キモノト存居候

敬具

三月 七日

重直

中川 貴 臺

侍史

この書簡の中で特に注目されるのは、大正三年の教育方針（前掲）の文言を借りれば、「形式の整頓よりも寧ろ内容の充実に努むること」および「生徒に対し無益の束縛を除き自治自製の風を發達せしむること」が、具体的な実践を通して示されている点にある。また、教育改革について、中川館長の方から小西学監に對して、細部にわたる提案がなされていることが窺える書簡である。末弘威磨氏による『立命館中学の過去現在及将来』の編輯は、この書簡の翌年であり、併せて、この期の中学校の教育事情を紹介して興味深い。

四、編入生「中原中也」の修業の怪

「日本のアルチュル・ランボオ」と呼ばれた、後の詩人中原中也が立命館中学校第三学年に編入してきたのは、一九二三（大正十二）年四月のことであった。時あたかも新教育の爛熟期であり、広小路から北大路への移転完了の年であり、全国中等学校野球大会第九回選手権大会にて準決勝進出、全国学生相撲選手権大会では優勝するという黄金時代の最中であつた。

県立山口中学校を優秀な成績で入学した中原であつたが、文学に傾倒して次第に学業を怠り、ついに落第

となった。中原の家庭教師をしていたことがあり、大正十一年に京大理学部に入學した井尻民男は、強力に立命館中学を中原に勧め、自ら京都での保証人となった。

医業を継ぐことを期待していた軍医の父親の重圧から逃れられる中原は、「生れて始めて両親を離れ、飛び立つ思ひ」（『詩的履歴書』）で入學し、「名状しがたい何物かが、たえず僕をば促進し、目的もない僕ながら、希望は胸に高鳴って」（詩『ゆきてかへらぬ』）いた。何が「希望」であったか明確ではないが、詩作に専念する意志を固めたのは東京時代に入った大正十四年（『詩的履歴書』より推定）であり、立命館中学四年生時に小説の習作数編があるので、当初は小説家を志したものとも推測される。

しかし、学校での編入生中原は、友人もなく、一人で読書しているかノートに何か書き込んでいるか（同級生・古田祐吉氏談）であったようである。このころ『ダダイスト新吉の詩』に感銘していた中原は、一緒に編入して机を並べた中村吉朗氏には、文学書を貸して詩作をすすめたり、自分の詩作ノートを渡したりしている。

こうした中原中也に、詩作へ志向させていく決定的な出会いが訪れた。それは当時京大國文科の学生で、立命館中学の國語を担当していた講師、富倉徳次郎との出会いである。富倉は、答案にダダイストばりの詩を書いて提出するような中原の詩的才能に興味を持ち、下宿に呼んだりしている。更に、そんなに文学が好きならと京大生の正岡忠三郎と友人で詩人である富永太郎を紹介し、以後四人で度々飲んだり夜通し文学を論じ合ったりしている。

どうにか辛うじて第四学年に進級した中原は、四年終了と同時に、その可否を確認しないまま、病氣のた

めに帰京した富永を追って、東京の大学に入学すべく上京した。そこでもまた富永の紹介によって小林秀雄、大岡昇平らと交わり、そこから河上徹太郎ら『白痴群』の同人というふうには、後のきらびやかな交友関係ができあがっていった。

もう一つ注目すべきは、中原は果たして四年修了なのか中退なのかという点である。一九一七（大正十四）年四月七日付の富永太郎宛書簡で中原は次のように伝えている。（抜粋）

中学の方が四年を落第してゐるとしたら東京にゐて予備校にゐたつて来年は受験が出来ないのだ。中学の方にはと兎も角此方が合格すれば及第にしてやるといつてゐるのだから。尤もそれはまだ学年試験の済んだばかりの時であつた。大變よくやれたと思ふ学年試験の点が知れてない時の話だから、案外それが実際よくやれてたとしたら及第してゐるかも知れないと思ふのだ。で、帰途は京都に下車してそれをしらべるつもりである。

帰省の際、学校に立ち寄つたかどうか明らかではないが、後日、友人に「東京に住めるようになった」と語っていることから、及第を確認したのであろうと推測される。ちなみに、立命館中学校学籍簿に見る実際の学年成績は次の通りであるが、不思議なことに気づく。

居 所
族 籍

(記載なし)

山口縣吉敷郡山口町大字下宇

野令一二七六ノ一

士族 謙助 長男

父兄の職業

医師

保証人

中原謙助

副保証人

京都市上京区神楽坂紫明学寮

内 井尻民男

入学事項

第三学年ニ入学 補欠試験に

合格

氏 名

中原中也

生 年 月 日

明治四〇年四月二九日

入 学 年 月 日

大正一二年四月 日

入 学 前 の 履 歴

山口縣立山口中学校三年

退 学

大正十四年四月九日 日本大学へ

命 退 学

(記載なし)

卒 業

(記載なし)

退 学 卒 業 後

ノ 状 況

(記載なし)

[国語及漢文]			
国 語	71		
漢 文	63		
作文・習字	68		
[英語]			
書取・訳読	51		
文法作文習字	70		
補読書取会話	58		
歴 史	47		
地 理	62		
[数学]			
代 数	70		
幾 何	50		
博 物 学	48		
物 理 学	64		
化 学	56		
図 画	85		
体 操	65		
出 席	58		
総点	986	平均	62

当成績表は、及落判定が記入されていないが、『退学 学籍簿』の巻に綴られている。四年修了で進路変更者はすべてこの巻に綴られている上、「日本大学へ」（実際の入学は大正十五年四月であるが）とあるので、結果的に第四学年修了の処理である。しかし、学年試験終了を待っていましたとばかり三月十日には上京しようとする中原に、東京の大学に「合格すれば及第にしてやる」という口約束があったということは一体どういうことであろうか。更に、大正七年の基準、平均で60点以上、科目で50点以上の基準によれば、平均点では辛うじてクリアしており、落としているのは二科目だけなので及第と考えられる。しかし、62点では他の生徒の場合、多くが「仮及」であるのに比して、事実を確認しないまま中原の言う通りの処理がなされている。当時はおおらかであったといえはそれまでであるが、学ぼうとする生徒の進路は、可能な限り保障してやりたいという判断と指導がはたらいたであろうことは、当時の指導方針から見ても十分考えられることではなからうか。（なお、角川書店一九七一〈昭和四十六〉年発行の「中原中也全集 別巻」に転載されている当成績表では、英語の書取訳読を81点とし、「この総点は計算誤り」としているが、学籍簿記入者の他の筆跡鑑定からも51であることは明らかであり、この総点も正しいことをここに指摘しておく。）

このあと中原中也は、長谷川泰子をめぐる奇妙な三角関係に翻弄されながら、大正十五年に日本大学予科文科に入学する（学費が続かず九月には退学）とともに詩作に専念するけれども、念願の第一詩集もなかなか刊行できず苦悩した。そんな中でも中也は、昭和六年にも東京外国語専修科仏語部に入学し、以後『四季』『文学界』をはじめ諸詩誌にランボオの詩を精力的に訳載するとともに、昭和十一年十二月、やっと第一詩集『山羊の歌』を刊行している。この辺の事情や文学上の位置づけは、ここでの目的ではないので別稿

(拙稿『中也詩の感性世界』)にゆだねるが、中原中也の京都での生活は、彼の生涯の中でも最も生き生きとした時期であり、立命館中学校の校風は、彼の可能性を温かく伸ばしてくれた学園であったといえよう。わずか二年間の短いものであったけれども、若き純な魂が躍動した時期であったことは、次の書簡からも窺うことができる。

①今日、立命館中学に行ってみました。廊下を全部一巡しました。そこからは京都北方の野面一面が見渡されます。なまめかしくもなつかしい野の中に、今日は雨にぬれて校舎がたつてゐる。三年二組の教室では、僕の教わった地理の先生が、永遠にウルル山脈の話をしてゐました。これから鴨の堤を沿うて歩きます。(昭和五年・河上徹太郎宛 抜粋)

②暑中御見舞申上ます。御無沙汰してをります。陽がジリジリ照りつけるのを見てゐますと、関西に住みたくなってしかたがありません。突然こんなことを言ひましても何のことだかお分かりにならないと思ひますが、そればかりが念頭を占めてゐて気が狂ひそうなくらゐで、何はあれそれを口にせずにはゐられないのです。(昭和十一年・山岸光吉宛)

③……十月になったら田舎に引上げます。そして月の半分を旅行して暮したいと思ひます。さしあたり行つてみたいのは、青海島、俵山温泉、尾道近傍の島々、京都(ここでは一ト月ぐらい、中学の時みたいに暮してみたい)、長崎、隠岐ノ島 等々。関東の自然は、やっぱり僕にはつまらない。

(昭和十二年・河上徹太郎宛 抜粋)

以上、中原中也の一件と関わって、本校の大正期の新教育を見てきたが、理論と実践に支えられたこの期の教育が、当時の多くの生徒たちに強い感化を与えたであろうことも、容易に察せられる。大正四年の卒業生、山本英雄氏は『母校の思い出』のなかで、次のように述べておられる。

学校長として学監がおられ、京都帝国大学の文学博士小西重直先生が学監に、福島亦八先生が主事で、修身の時間にはこの両先生が訓話をされ、重厚で温厚な両先生を尊敬しておりました。外に数学の小泉先生、漢文の小田垣先生、習字の小谷先生らから懇切丁寧な教えを受け、立派な先生でした。私は卒業と同時に小田垣先生の紹介で、京都帝国大学で財政学の教授であった小川郷太郎先生の書生として、昼は先生の吉田山のお宅か学校の図書室につめ、夜は当時法政学校から立命館大学に改組された大学予科一年生として、中学校舎の横にあった二階建ての大学に通いました。小川先生は、後に大蔵大臣にもなられた実に立派なよき師でした。

学校の校舎はオンボロで狭く、当時の私立学校としては外観はみすばらしくあったが、内の先生方は教育熱心な、尊敬する先生が多くありました。当時としては不便で不自由な点が多々あったが、先生も生徒も困難をお互いに忍びながら向学心に燃え、将来の夢を抱き体を鍛えつつ、教師と生徒が相互に敬愛し信頼と誠実とを持って、永い歴史の中に一貫して耐え忍んできた不屈の精神が、立命精神として今日あるのだと思います。（立命館中学校高等学校『八十年の歩み』所収より抜粋）

本小稿をまとめるに当たって参考とした文献は、ほとんど本文中に記したが、他には、『同志社百年史』（一九七九年十一月刊、上野直蔵編纂）、『小西重直の生涯と思想』（一九六七年十一月刊、加藤仁平著）などがある。なお、西園寺伝編纂室の岩井忠熊先生ならびに福井純子さんに多大の援助を賜りましたこと、厚く御礼申し上げます。

（元立命館中学校・高等学校校長、百年史編纂委員会参与）